



石

見銀山から温泉津まで銀山街道と呼ばれる十六キロの道を歩いてみた。ぼくにはこういう旅の発想はないので、思いついて誘ってくれる友人がいることをとてもありがたいと思う。

大森の代官所から出発し、龍源寺間歩を経て標高四百メートルを超える降路坂(ごうろざか、途中降露坂という表記も見た)を頂点に徐々に下りながら温泉津沖泊に至る。一部舗装された幹線道路を通らねばならないが、江戸初期大久保長安によって整備された街道がそのまま残っているところもあるし、登山道と言って差し支えない箇所も少なくないので、起伏にも変化にも富むユニークな街道だった。もつと歩いている人がいてもよさそうなものだが、ゴールデンウィークのまつただ中、五月五日の昼を挟んだ五時間の行程中、だれともすれ違わなかった。

大森からの銀と温泉津からの物資が盛んに行き交うかつての幹線道路なのだが降路坂の前後は、急勾配で一人がやつとの道が続き川も何度か渡らなければならなかった。昔の人は偉かった、と月並みな感想がまづは浮かんでくるのだけど、今も輸送を実際に担っているのがトラックであるように、当時は牛が運んでいた。山陰の急峻な山道の輸送には馬よりも牛が適していたのだという。二股に分かれた蹄によって悪路でも

バランスが取れるというのだ。カモシカが人間には不可能なところをすいすいと移動するあの感じに近いかも知れない。山陽だと主力は積載量に勝る馬に取って代わるので、今で言えば牛は軽トラ馬は大型トラックにあたるのだろう。

降路坂に至ると、もうあとは下るだけなのでとてもほっとした気分になり、座って休憩を取った。よくしたもので、往還賑やかなころはもとより一九四〇年代まで茶店が営業していた。実際に自分の足で歩いてみると、その需要と供給の見事な一致が実感できた。

もう一カ所やはり見事な一致を感じるところがあった。降路坂から二キロばかり下るとようやく視界が開けてきて、山から抜けたことがわかる。道も広くなって二人並んで歩けるから、緊張もすっかり緩んで「飯にしよう」という気になる。かつてそこにちゃんと宿場町があった。西田集落は、今も街道の両側にほぼ同じ間口の家々が玄関を向けて連なっており、ところどころ空き地空き家になっただけはいるが典型的な宿場町の風情を残している。往事は宿屋や飲食店が軒を連ね大変な賑わいだったのだという。銀山には二万の人々が暮らし遊郭まであったというのだから、その輸送中継拠点として西田は栄えた。牛はここで荷替えをしたというから人や牛でこつた返していたことだろう。

空き家 5

木幡智恵美

蘇る家②

NTT社員用の長屋が壊された後、しばらくは空き地になっていた。我が愛犬エリーをそこでよく走らせたものだ。何年かして建売住宅が二軒建ったが、一年以上入居者がなかった。一軒によく四大家族が入られた頃には、我が家の子どもたちは大きくなり、家から出る者、学校を終えて帰って来る者など出入りがあり、奥の家は次々に空き、子どもたちの声が聞かれなくなっていた。建売住宅の一軒に入ったのは、小学生と高校生の居る一家で、隣保に見る久々の子どもたちの姿だ。少し経つてもう一軒に入られたのは、やはり二世代の家族。その子世代は皆大きく、毎朝仕事に出掛ける車の音が聞こえた。ところが、後に入られた一家が住まれたのはわずかな期間で、別の場所に家を建てて出られ、また家だけが残ってしまった。

そこに借家という形ではいられたのが大家族。二女さんに子どもが出来たので、その面倒をみるのに両親も共に住むという一家だ。三女、四女も同居し、ご両親、二女夫婦の六人、車は敷地内に入りきららず、駐車場を借りておられた。

娘が第一子出産後の育児休暇中で、よく我が家に来ていたのだが、お隣の二女さんと顔を合わせてお互いびっくり。何と、娘が住む町の母親教室で一緒したことがある人だったのだ。やはり玉湯のアパートに夫婦で住んでいたという。生まれてくる子どものために娘夫婦と同居するご両親はどちらもまだお勤めで、遠くの職場まで毎日通われた。お腹の子は無事生まれ、その後、娘が女の子を出産すると、半年後にお隣には二人目の男の子が生まれた。親しくさせてもらっていた大家族は、やがて玉湯に家を建てて出て行かれた。同じ校区で、長男同士が同学年、たまに互いの家を行き来しているようだ。娘のところ三番目、二男が生まれて一年くらい後、そこにも第三子、または男の子が生まれたということだ。

人気が無くなったお隣には、持ち主が時々管理に出入りするという状態が続き、新たな家族が入られたのは二年前。もう一軒の高校生と小学生はすっかり大きくなり、働いたり、遠くの学校に行ったりと、子どもの姿が見えなくなったけれど、今度入られた家族にも高校生と小学生がおり、久々に甲高い声が聞かれるようになった。

30代フリーター 朝日新聞の世論調査では、岸田政権の「異次元の少子化対策」に「期待できない」は61%で、「期待できる」33%の倍近くにのぼっている（4月10日朝刊）。

年金生活者 少子化は自然的と言っている流れであり、それを人為的に逆流させることができる。「対策」などないことを、国民の多くが察知している。

「団塊の世代」を誕生させた「多子化」社会が敗戦直後に出現したのは、復員した若い男性の婚姻が増えたことによるとされている。それが次々と子をなした背景には社会全体の貧困があった。栄養も衛生も今ほど十分でなかった当時は子供の死亡率が高く、それが子だくさんを促した。

当時よりはるかに豊かになった今の社会は子供の死亡率を下げ、子だくさんを目指すインセンティブが失われた。豊かさゆえに教育に費用がかかるようになり、多産を抑えるインセンティブが取って代わった。

前者の方法は、個人を規律ある働き手にすることによって、その生活を豊かで規則正しいものにし、後者は公衆衛生の諸施策や医療システムの整備を通して人命の保護をはかった。その結果、寿命は延伸し、健康は増進した。高齢者が増える一方で、乳幼児の死亡率が下がり、それが多産を抑制する方向に働いた。少子高齢化は必然の結果だった。

30代 先進国では働き手が足りなくなり、移民に頼らざるを得なくなっている。

年金 生権力はそれに対応した新たな監視や訓練をするようになっていくはずだ。まず移民を自国に順応させなければならぬ。それだけでは摩擦が大きくなるだけだから、自国民を移民に慣れさせなければならぬ。両者ともスキルの向上とか人権意識の高揚といった目標を設定することによってなされているだろう。

それらは監視なしには不可能だ。監視から逃れる個人は排除も辞さない。

30代 同じ豊かさが高齢化も促した。成田悠輔という経済学者が、少子高齢化問題を片づけるために「高齢者は集団自決、集団切腹みたいなことをすればいい」と発言し、批判を浴びた。

年金 経済合理性を理由に生命の末梢を正当化する主張が多数に受け入れられるはずはない。経済合理性だけから見ても、彼の主張は妥当性を欠いている。

仮にそれが実行されて、日本から一定年齢以上の高齢者がいなくなったらどうなるか。介護をはじめとしたシルバー産業の市場規模は2025年には100兆円を超えるという予測がある。「集団自決」で高齢者が激減すれば、この産業は大打撃を受け、大勢の現役世代が職を失うだろう。

30代 「集団自決、集団切腹」は「集団引退」の比喩とも受け取れる。年金 少子高齢化がもたらす最大の問題は社会保障制度の破綻とされ、現役世代の負担で支えられている高齢者の年金はこのままでは維持できなくなる」と予測されている。高齢者が「集団引

日本ではそのための法的な基盤をつくるために、難民認定の申請中の送還を可能にすることなどを盛り込んだ入管法改正がもくろまれている。

30代 日本の総人口は2070年に8700万人にまで減少するという厚生労働省の国立社会保障・人口問題研究所の推計が出た（4月27日朝日新聞朝刊）。

退」すれば、まったく稼がなくなるわけだから、現役の負担はいっそう増える。やはり高齢者に「集団自決」してもらって数を減らすしかないという結論に理屈上はなる。

成田の主張はもとと不可能なことを求めるもので、当人もそれを承知で語ったのではないか。少子高齢化を止めることなんてできない相談だよ、と。

30代 止められない理由はなんだ。年金 少子高齢化は、フリーコーのいう生権力、人を殺すのではなく生かす権力がもたらした帰結として理解することができる。

近代以前の権力が、逆らう者を殺したのに対し、近代に特有の生権力は人間を生かして管理しようとする。そのために、ふた通りの方法をとる。ひとつは個人を対象に監視や訓練によって従順な人間をつくりあげることであり、軍隊や学校、工場がその舞台となる。もうひとつは集合としての人間を対象とし、人口や寿命、健康を管理する方法で、舞台は社会全体だ。

年金 働き手が減り、資本主義を資本主義たらしめる利潤の主要な源泉が、大勢の労働者から、ひと握りの天才に移る可能性がある。

働き手が減ったぶんはAIやロボットが埋め合わせる。労働者が賃金以上の働きをすることによって得られていた利潤は大幅に減る。利潤の源泉はイノベーションに求めざるを得なくなる。

そうなると、これまでのレベルを超えるイノベーションが必要となり、それを実現し得るまれな天才が歓迎されるようになる。吉本隆明は前世紀の終わりに、そんな社会の到来を予言するようなことを語っていた。「とにかくいまの大きな問題は《天才領域》だと思っっているってことなんです」「『このやろうは天才じゃないか』という天才が出てくる領域があるんですよ」（『悪人正機真。』、『プレイボーイ』2000年1月1・11日号）

その「領域」は人間の文化全般におよぶだろう。大谷翔平や藤井聡太の出現はそれを予感させる。

ニュース日記 875
中村 礼治

少子高齢化は止められない